

# 羽柴副会長の死を悼む

佐伯史談会会長

高 木 嘉 吉

昨年の春、佐伯独歩会の役員会に羽柴副会長と一緒に出席した。会場は佐伯高校の応接室であった。会が終つて外に出ると春雨がしとしと降っていた。たいしたことはあるまいと、雨の中を自転車をとばして帰宅した。

私は何事もなく過ぎたが、羽柴副会長は風邪かぜを引いたようであった。それがこじれて南海病院に入院するはめになった。すぐ退院できるだろうと思っていたのに、入院が月を越す程長引いた。風邪はよくなったが肝臓の悪いことが発見されて、その療養に努めているとのことであつた。

六月に退院したが、完全に恢復したのではなく、毎週通院して手当を受ける状態であつた。時折慰問して談話を交したが、素人の悲しさで病気が進行しつつあることなど気付く由もなかつた。

それは羽柴副会長自身もそうであつたのではないかと思われる。肝硬変と後で分つたが不治の難病であつた。しかし氣力盛んな副会長は、静養をすすめても読書や執筆をやめなかつた。ことに編集中の『本匠村誌』の仕事に精力を傾注した。

年が改つて本年一月、史談会は恒例の新年初歩きで三河内を探訪した。尾高知神社やお頭様に参拝して、悲劇の人佐伯惟治の最期を偲んだわけであつた。羽柴副会長も同行した。元氣な姿に参会者一同副会長の健康を祝福したのだが、之が副会長が探訪に出かける最後にならうとは、凡夫の悲しさ知る由もなかつた。

責任感の強い副会長は、健康上充分な仕事ができないとして、会の事務、会計、機関誌編集等の仕事を私と相談の上で後進に託した。再起不能を自覚しての措置であ

ろうと心に泣きながら共に事を運んだ。

私はもう何もできないから副会長も辞任したいのとことであつたが、何もしなくてもよいからと留任してもらつた。若い執行部は事務処理の上で、副会長を訪ねて質問することもあつたが、指導は明快適切であつた。

こうした中で病勢が進んで、健康の衰えが目につく様になつた。時折慰問に出かけても、長居は禁物とすぐ引上げることにした。

病勢が昂じて長門病院に入院したのは九月であつた。

絶対安静・面会謝絶ということであつたが、特に許しを得て面会した。すっかりやつれて、酸素吸入と点滴で命をつないでいる副会長であつた。手を握って「元氣を出してよ」と励ましたが、病室の空氣は重かつた。

かくて八重夫人をはじめ、近親の人々の手厚い看護と最新最善の手当が続けられたが、遂に起たず、十月十九日七十七年の生涯を閉じた。惜しい人を失つたと長嘆息したが及ばぬことであつた。

羽柴副会長とは史談会発足以来二十数年、会長・副会長として苦楽を共にした。交誼の深さは友情を超えるものがあつた。呑氣な私を助けて、企画、運営実によく動

かれた。副会長を失つて今更ら偉大な存在であつたことを思い、片腕を失つた感がある。

副会長の遺徳を偲んで、第一にあげたいのはその口である。巧言令色ではない、巧妙な話術はいつも会う人を引きつけて離さなかつた。

第二はその足である。南郡佐伯市内には足跡の及ばない所はない。

第三はその手である。得意の謄写版技術を駆使して、機関誌を発行した。謄写版印刷の『佐伯史談』は実に百四十三号に達している。

こうして史談会運営の要としてその功績は量り知れないものがある。本当の史談会の隆運は君の活動の賜といつても過言ではない。君は多忙の中に特技を持ち、秋の山で松茸を狩り、夏の清流で鰻を釣つた。松茸も鰻も君を待つであらうが、もう君の姿を見ることはできない。

思い出は尽きないが、一先づ筆をおこう。今はただ天国での安らかな眠りと冥福を祈るのみである。